

Title	英国の二大政党制と労働党 (一)
Sub Title	
Author	占部, 百太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.2 (1920. 2) ,p.197(55)- 213(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19200200-0055
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200200-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に涉りて解釋上重要な影響を及ぼすものたり第五百四十五條第一項但書の解釋に關しては殊に然りとす是故に解除の效力の解釋につき前上述べ來りたる理論の正當なる所以を説明するか爲めには必然的に物權契約の性質如何の問題に論及せざることを得ず本來此問題に關しては我民法制定以來學說極めて紛糾し有力なる學者にして此問題を論究せざるもの殆んど之れ無しといふも過言にあらず然るにも拘はらず尙ほ未だ今日に於ても說一に歸するものと見ることを得ず是故に外形上稍々岐路に入るの觀なきにあらざれども以下に於て此問題につき少しく論述する所あらんとす。(未完)

英國の二大政黨制と勞働黨(一)

占部百太郎

大戰前に於ける英國政黨界の分野は、第拾七世紀以來兩々對峙したる自由統一兩大黨に劃立せられて居た。外に愛蘭國民黨と勞働黨とが在つたけれど、前者は民族を代表して愛蘭自治を目的としたる一時的存在の理由を有するに過ぎざる黨派、又後者は勞働者てふ一階級の利益を主張せむが爲發生したる黨派で、然も大なる勢力を成すに至らなかつた。兩者孰れも英吉利帝國全體の國利民福を目的とするものでないから、真正なる意義に於ける政黨とは謂い難かつた。英國は依然たる兩大黨交立の國柄として、この約二世紀半に亘つて確立せられたる所謂 *Two-Party Politics* の制度は、未來永劫破壊せらる可くも見へなかつた。所が大戰は英國の凡ゆる國家社會の制度をば、殆ど全く破壊し去つた。財政も、産業も、交通も、教育

も、其他の文物制度も、悉皆混亂の状態に擠されて、何れも改造を要せざるはないのであるが、此の歴史的政黨制度亦其の例に漏るゝことは出來ない。英國は今二大政黨の國から、他の歐羅巴大陸の國と均しく多數政黨の國と激變したのである。一昨年十二月新選舉法に依つて行はれた總選舉の結果は、最もよく這般の状態を示して居る。

現政府側(聯立内閣側)の黨派

- 統一黨 三百三十四名
- 自由黨 百三十三名
- 國民民主黨(National Democratic Party) 十名
- 獨立黨 一名
- 合計 四百七十八名
- 反對側非聯立内閣側の黨派
- 労働黨 六十三名
- 統一黨 二十三名

愛蘭統一黨

- 愛蘭統一黨 二十五名
- 自由黨 二十八名
- シン・フェイン黨 七十三名
- 愛蘭國民黨 七名
- 國民黨(National Party) 二名
- 獨立黨 四名
- 獨立急進派(Independent Radical) 一名
- 社會黨 一名
- 消費組合派(Co-operator) 一名
- 除隊海陸軍人聯合派(Federation of Discharged Sailors and Soldiers) 一名
- 合計 二百二十九名

是等の十に餘る政黨派の多くは、戦前まで一政黨たりしものが、會々大戰を機として朝野兩黨に分離したるか、若くは大戰後俄かに發生したるか、然らざれば特殊の目的を以て生出したる一時的黨派に過ぎざれども、何れにしても英國の政黨制度が亂離混沌の状態に在ることは、否認す可らざる事實である。自由統一の二

大歴史的政黨が朝野の兩側に分離對立したる現象に就ては、余の追つて評論を加へむと欲する所なるが、最も注目すべきは、愛蘭の分離獨立を目的とするシン・フェイン黨が、愛蘭國民黨の地盤を殆ど全く蠶食して一躍七十三名の最大反對黨となりたる事と、労働黨が従來の約五十名から六十三名の多數となり、事實上最大反對黨(府黨)シン・フェイン黨は實際一名もウェスト・ミンスター^{Westminster}の國會に出席せぬとなつた事である。世界の模範たる英國の憲法政治が、従來の如く圓滿に運用せられたのは、主として兩大政黨の交立が恰も機械の回轉するが如く順當に行はれたる結果であるとするならば、今この Machine Politics の破壊が將來英國の政界に及ぼす可き影響の多大なることを思はざるを得ない。英國政黨界の分野が此の如き異現象を呈出したのは、多分大戰後に於ける一時的變態であらう。戦後に於ける各般の經營、否戦後の所謂改造事業夫れ々緒に着くに至らば、總て英國政界のパーテイ・ラインも安定するであらう。然し乍ら、如何に英國の政黨界の分野が安定するに至つたとしても、大戰前否更らに溯つて一九〇六年自由黨内閣成立前に於けるが如き、兩大政黨が交互に英國の政權を獨占する制度其儘の復活は、到底これを期待するを得ないと云ふ事は、斷言することが出来やうと思ふ。目前に見るが如き、愛蘭シン・フェイン黨の跳梁跋扈は、英國政府が急速に處置せねばならぬ最も焦眉の問題であるから、此の半世紀に亘る英國政界の一大宿題は、戦後の好機會に於て必ずや解決せられるであらう。仍で最も將來英國の政界を多事ならしむるは、云ふ迄もなく労働黨の急激なる發展である。一九〇六年自由黨が久し振りに朝に立つてから、其の友黨たる労働黨は事實上英國會に於ける第三黨として、種々の社會政策を施設せしめたのであるが、今回の大戰が労働者の力に負ふこと多大なりしだけ、それだけ労働黨の英國政界に於ける地位と勢力は重きを加へた次第である。左れば自由黨が一昨冬總選舉の大敗北から捲土重來して、再び統一黨と互角に對立することを得るとしても、従來の兩大政黨交立の制度は復た昔日の状態其儘に復活するを得ないことは明白である。即ち自由統一兩黨ともに今後益々労働黨の牽制を受けねばならぬ。換言すれば、英國政黨界の將來は一つに繋つて労働黨の發展と其の態度如何に依つて決せらるゝとも云ひ得らるゝであらう。此に於てか、英國労働黨の研究は、將來に於ける同國政界の趨勢を卜知する上に取つて喫緊

事である。

英國労働黨を研究するに先だち、自由統一兩大政黨を始め、他の比較的小政黨の概観を試る必要があらうと思ふ。即ち此の如くしてはじめて、労働黨の由來乃至地位を明かにすることが出来るからである。

英國の政黨が近世的形態と組織を具ふるやうになつたのは、一八三二年の選挙法改正以後のことである。新選挙法に依つて、總選挙が行はるゝに際し、夫れく黨の組織を改革すると共に、ホイッグ黨は自由黨と改名し、トリー黨は保守黨と改名して、何れも面目を一新した。自由黨は新選挙法に依つて選挙權を與へられた重もに、商工業者から成る中等階級を味方に加へて、大に黨勢を加へたのである。然し保守黨の方でも、一八六七年の第二回選挙法改正に際し、ヂスレリイが都市の労働者に選挙權を賦與した結果、多少下級社會に味方を加へた。保守黨は貴族富豪の味方で、自由黨は中等社會や労働階級の徒黨であると云ふのは、要するに比較的の事である。一八四六年サー・ロバート・ピールが穀物法廢止を斷行したので、保

守黨は舊來のトリー分子と所謂ビライト(ピール)の味方と分離し、グラットストンも其の中にあつた。後者は後に自由黨と合體した。自由黨の方でも、元來一部の大貴族を中堅とした舊來のホイッグ分子と、重もに下級社會の利益を代表して居たラヂカル派とは、常に黨内に於て軋轢して居たのであるが、會一八八六年グラッドストーンが愛蘭自治案を國會に提出したのを動機として、チェンバレン一派は分離して、別に Liberal Unionist 黨を樹立した。此のリベラル・ユニオニストは、良らく別個の團體を形成して居たのであるが、後には保守黨と合體して今日の統一黨となつたのである。自由黨はチェンバレン一派を失つた代價として、愛蘭國民黨の後援を贏得たけれど、國民黨は決して自由黨に非ず、併かも自由黨の或る重要なる信條には常に反對して居たのであるから、自由黨に取つて差引相償はなかつたのである。自由黨は南阿戰爭に小英國主義を唱道して、戰爭に反對した結果、大に黨勢の不振を買つたのであるが、統一黨の側でも、チェンバレンが關稅改革論を主張して時の宰相バルフォアと争つたが爲、竟に黨内の不和を招き、一九〇六年自由黨に政權を讓るの餘儀なきに至つた。前後約二十年間、尤も一八九二年から同九四年までは

自由黨内閣であつた政權に離れて居た自由黨政府の社會政策は、大に下級社會の人氣に投じて、自由黨は恰も旭日冲天の勢を以て黨勢を擴張したのである。然し第三回愛蘭自治法案の通過は、自由黨に取つて餘程の犠牲であつたところに、今回の大戦は破裂した。元と自由黨はグラッドストーン以來人道主義を唱へ、小國民の權利を主張して、外戦に際して毎時も弱腰であるから、帝國主義を信奉し對外硬論者である保守黨の爲に其の都度致さるゝの例である。クリム戦争でも爾うであつた。露土戦争(一八七六—七年)でも爾うであつた。南阿戦争でも亦爾うであつた。今度の大戦破裂の後、アスキス内閣を最も強く支持したのは、自由黨よりは、却つて反對側の統一黨であつたことは、今尚ほ世人の記憶に刻たなる如くである。然し自由黨の中堅たるアスキス、マッケナ、ランシマン等の戦争に熱心を缺いて居たるは、彼等平生の主義と信念から出たのであるから、ロイド・ジョージ等の一派は統一黨と固く提擧して、一九一六年末遂に陰謀を以てアスキス内閣を破壊した次第である。所が一昨年末の總選舉では、前掲の表が示す如く、アスキス派の自由黨は二十八名に激減し、これに政府側の自由黨百三十三名を加へても、尚ほ統一黨朝野兩派の合計數の半ばにさへ達しない不振の狀態に陥つた。然し此の如き結果を齎らしたのは、畢竟戦争氣分未だ去らず、ロイド・ジョージをして講和に成功せしめむとの英國人多數の希望の反響に過ぎない謂はゞ不自然の現象であつたのである。應て自由黨が平和政策を以て頽勢を挽回す可きは略ぼ想像が出来る。

三

以上は英國兩大政黨の來歴の概観であるが、然らば兩者の主義綱領の間には何程の相異があるであらうか。英國憲法史の大家アースキン・メーは、保守黨の大主義は權威 (authority) であつて自由黨のそれは人民の權利及び特權 (popular rights and privileges) であるとの定義を與へて居るけれど、國王や教會の權威の衰微して、一方に於て保守黨と雖、下述のやうに人民の味方を以つて任じて居る今日、この定義は稍、時勢に適合しない憾がある。保守黨ばかりが國王や教會の權威を主張しないが如く、人民の權利及び特權の擁護者は必ずしも自由黨の專賣ではない。要するに、兩黨の主義綱領の間に程度の相異はあつても、種類の差別はないのである。凡そ政黨が人種若くは宗教によつて分立するか、又は絶對に相容れない政治上の

意見の根本的相異によつて相分るゝときは、選挙人は何處迄も各自の政黨に忠實であつて、各政黨地圖の色別は久しきに亘つて變動を見ることが少ない。愛蘭の政黨の團結強固なるは、其の適例である。歐羅巴大陸諸國の政黨は、人種や宗教や階級を代表したるものが多いから、政黨間の競争は殺伐で且深刻である。これに反して北米合衆國の共和黨と民主黨との間、英國の自由黨と統一黨との間には、必ずしも踰越することの出来ない鴻溝がある譯ではない。畢竟主義綱領が非常に相違して居るのではなくして、競争の焦點は單に政策の相違に外ならぬ。即ち通常の時事問題は政黨の分野を劃して居るのであるから、敵黨の繩張内から投票を獲得すること不可能ではない。従つて政黨地圖の色別は常に大なる變動を免れない。自由保守兩黨の兩極端の間にこそ大なる距離はあれ、兩黨員の大多數は兩黨間の境界線に密集して居るのであるから、前に述べたやうに、保守黨は常に自由黨の離反者に依つて補充せられ、反對に進歩的保守主義者は境界を越へて自由黨側に投するのである。通常總選挙の行はるゝ毎に、全選挙區の四分の一は前と反對側の政黨に投票するの例である。"Government of England"の著者ローウェル總長

は説いて居る。

此の如く英國の兩大政黨は、各自の根本主義に於て甚だしき相異あるものでない。故に朝に立てる政黨は、其の根本主義に觸れない問題に關して國會に敗北を取つたとき、甘むじて敵黨に政府城を明け渡す雅量を有つて居る。と云ふのは、若し根本主義に於て甚だしき相違あるときは、敵黨に政權を譲渡することが出来ないからである。此の如くして政府即ち内閣は交迭しても、これが爲國家に激動を與へずして、政府の行政機關は常に圓滑に運轉するのである。歐羅巴大陸諸國に於ては、各政黨の信條は明白に規定せられて居るけれど、各黨の時事問題に對する關係は混亂して明かでない。北米合衆國では英國の如き議院制度が確立して居ないから、米國の行政府は嚴重に立法府から區劃せられて居る。政黨の主義並びに特殊の政策に對する立場往々にして明白を缺いて居る。これと反對に英國にては、兩大黨の一般的政治主義は容易に判明し難いけれど、凡ゆる重大なる法案に對する朝野兩黨の政見は明瞭にして見まがふ可くもない。

第拾九世紀を通じて二十世紀に亘つた英國の内政改革——選挙權の擴張、救貧

法や刑法や地方制度及び文官制度の改革、衛生の設備、普通教育の確立、労働組合の解禁、非國教徒や羅馬教徒の解放、其他輓近の凡ゆる社會政策——は大部分自由黨政府の手で遂行せられた。穀物令廢止や、第二回選舉法改革は保守黨政府の手に斷行せられたけれど、是等逆も自由黨が其の素地を作つたか、然らざれば、其の後援を爲したから成功したのである。左はあれ、保守黨も其名稱に相應はしい役目を演じたのである。保守黨を以て凡ゆる改革或は凡ゆる建設的立法に對して、一圖に反對し來つた者と想像するは大なる謬見である。ピールは穀物法廢止を遂行した外、自由黨が一般的州部警察制度を立てた前十一年即ち一八二九年に於て、彼は既に都市警察制度を制定した。夫れから第十九世紀を通じて、保守黨は労働階級の狀態を改良せむが爲、工場に關する法律を制定することに就て、自由黨に劣らない程労働者に對して友誼的であつたのである。自由黨は常に労働者の味方を以て任じて居たにも拘はらず、アダム・スミスに依つて提唱せられ、リカードやミル父子に依つて祖述せられ、而して主としてグラッドストンに依つて實施せられた自由放任(Laissez faire)の主義は、痛く下級階級に不幸なる影響を及ぼして、爲めに自由

黨の黨勢に崇りを爲した。極端なる自由競争、放任政策の弊害は忽ち見はれて、これを矯正す可き障壁の必要が迫つて來たので、道がに自由黨も自由放任主義を抛棄せねばならなくなつた。此の如くして第三十世紀に入つて、自由黨は益々労働階級の爲、社會政策を行つたのである。然し乍ら保守黨と雖、唯だ工場法とのみ云はず、労働者の爲に住宅を供し、各種の保險法を布き、養老年金を與へ、職業を紹介する等、各般の社會政策を行うことに於て、曾だに反對せざるのみか、寧ろ進んで援助を藉したのである。相異は單に自由黨が常に主動者で、統一黨は客位に在つた迄である。

自由黨と統一黨とは、一般政治的主義と教條とに於て甚だしき相異を見ないけれど、各自夫れ々傾向を異にして居る。反對黨では承認しないけれど、自由黨は自からより、多く民主的で、より多く人民の信用を受け、又より、多く労働者に對して同情を有して居ると信じて居る。この點に於ては労働黨も亦自由黨以上の自信を懷いて居る。自由黨側では云ふのである。自由黨は信念から労働に關する立法に賛成するけれど、保守黨は投票を獲得せむが爲、之に賛成するに過ぎないので

あると。

自由統一兩大黨は一國の政策の上に於てこそ激烈に争ふけれど、元來政治の根本主義に於て甚だしい相異を見ないのであるから、其の争たるや殺伐でも深酷でもない。現に今度の大戰前から、兩大黨の間に外交政策と國防の第一線たる海軍問題は、政争の目的としないと言ふ諒解が出来て居た程で、外間から見ると、何だか真劔勝負でない感じがする。或人が英國兩大黨の政争は、オクスフォード、ケムブリッジ、兩大學の競技を其の儘政治社會に移したものであると評したが、誠に其の争たるや、フエアプレーで、政策の上に於て破るれば、兩黨何れも潔く敵黨に政權を譲渡すこと、恰もベースボールの競技で、一勝負終ればシートを代るが如くである。此の如く政争が公明正大で、淡白であつてこそ、はじめて政治生活の快味を感ずるのである。

四

この兩大黨の間に介在して、第拾九世紀後半以來第三黨たる役目を演じ來つたのは愛蘭國民黨であつた。然し愛蘭國民黨は一昨冬の總選舉に約八十名から七

名の少数に激減して、今では辛うじて前年の殘骸を止むるに過ぎない。同黨が此の如き異常の敗北を取つたのは、大戰中獨逸と内通して獨立を企て、居たシン・フエイン黨が巴里の講和會議を機會として多年の目的を遂げむが爲大活動を演じた結果、俄かにこれに地盤を蠶食せられたのと、他に黨首ジョン・レドモンドの死も少なからず同黨今日の頹勢を招いたと思はる。然し愛蘭の獨立は到底英國の承認し能はざる所であるから、早晩愛蘭問題は他の何等かの形で解決せられねばならぬ。愛蘭が國民黨の主張するが如き自治の目的を遂ぐると否とに關はらず、比較的穩健分子より成る此の黨派が、今日の儘衰滅して了はうとは信せられない。今やシン・フエイン黨の跋扈と共に、愛蘭の秩序は亂れ綱紀は弛廢して、英國官憲は手の下しやうもない無政府の状態であるが、戦時氣分の減退に連れて、いづれは騷擾も鎮定せらるゝであらう。其の時は即ち愛蘭國民黨が今日の頹勢を恢復する機會であらう。アイザック・バットやバーネル以來終始一貫愛蘭自治の大目的を固執して、一切の妥協を排し、其の領袖等も仕官を求めず、黨員舉つて英國政府の手から顯位榮稱(愛蘭に於ける法官の外)を斥けて、苟くも個人的昇進の機會を無視し來つたのは、其

の賢愚は措いて、操守の堅固なる兎に角尊敬に値する政黨と謂はねばならぬ。之を要するに、愛蘭問題が如何に解決せらるゝを問はず、愛蘭の政黨の勢力が全然英國の政界から驅逐せらるゝの日は近い將來ではあるまいと思はる。

次に一九一七年國民黨(National Party)と云ふ非常に名稱の堂々たる新らしい政黨が生れた。この政黨は階級的地方的若くは宗派的政策に反對し、而して對獨戰争を手強く行ひ、且獨逸の勢力の絶滅を目的として居る。其の發起者には富豪が加つて居ると見へて、極めて短時期の間に二十五萬磅の基金を獲たと宣言して居る。黨員と云つては十人に達せざる代議士と、他に事を好む名もない少數貴族に過ぎないけれど、其の宣言する所は曰く「正直なる行政、純粹なる政治組織及び榮稱の非賣曰く「過去多年に亘つて、舊來の政黨制度は英國國民の精神の組織せられたる假僞以上に出でざりき」。曰く「若し吾人にして戰爭に勝利を獲むと欲せば——而して戦後も——兎に角吾人は此の政黨てふ蝸子の緊扼より解放せられざる可からず」と。多少英國政黨界の弊害を指摘して肯綮を得たるものないでもない。若し大戰があの上永く續いて居たならば、此の新政黨が勢力を獲る機會があつたか

も知れない。所が戰爭もやがて終り、其の上一概に名聲を博うしやうと焦躁つたから、この黨派は當初の高い決心から外道に墮して了つた。一昨冬の總選舉にも辛うじて二名の代議士を出したに過ぎなかつた。今後此の黨派が盛大になる時が到來するかも知れないが、少なくとも此の黨派が揚言した英國政黨政治の絶滅は期待せられさうにも見へない。

夫れから新選舉法に據て、婦人に選舉權及び被選舉權の與へられた今日、英國に婦人黨(Women's Party)が生出することは、自然の趨勢と見らるゝ。婦人參政權論者(Suffragette)は、新選舉法が既に婦人に選舉權と共に被選舉權をさへ與へた今日、全然當初の目的を達成した譯であるから、既に政黨的運動をする理由を失つた。それで婦人は今後別に恒久的政黨を組織しないで、結局現在の政黨の何れかに夫れ々味方するに至るであらうと觀察するが妥當と思はる。